

2022年01月04日(火)【外為Lab】松田哲

タイトル:【謹賀新年】

明けましておめでとうございます。

今年も、何卒よろしく願い申し上げます。

+++++

年初早々に、ドル/円は、従来の高値だった115円台ミドル(115.50ア라운드)を更新して、力強く、上昇しています。

日経平均株価が、大きく上昇していることが、後ろ盾になっている、と考えます。

今年の金融市場(外国為替市場、株式市場など)が、活況になる兆しではないか、と期待感を膨らませています。

昨年末から感染が急拡大している「オミクロン株」に対する懸念はあるものの、マーケット(金融市場)は、楽観視しているようにも映ります。

+++++

今年(2022年)のテーマ(相場の材料)は、まず第一に、各国の金融政策だ、と考えます。

米国は、インフレ傾向に対抗するために、利上げの環境を整える姿勢を示しています

その為に、テーパリング(量的緩和策の縮小)を既に開始しています。

米国は、テーパリング終了後に、政策金利引き上げを行う予定、と考えます。

+++++

それに対して、欧州は、米国に比べると、利上げを急いでいない、と考えます。

欧州は、むしろ、コロナウイルス問題で、疲弊している欧州経済を、どうにかしてサポートすることを第一義にしている様子がうかがえます。

欧州も、もちろん、インフレが進めば、それに対抗するために、政策金利を引き上げる腹積もりはあるのですが、まずはコロナ対応策が先だ、と考えている節がうかがえます。

+++++

欧州の金融政策は、様々な国の様々な都合を汲み取りながら決定する必要があります。

それは、欧州中銀（ECB）の宿命でもあります。

ドイツは、インフレに対して、強烈的な、そして強行的な手段をもって臨む傾向があります。

しかし、経済的に比較的弱い欧州の国々は、そういった強烈的な対抗策を望まない傾向があります。

欧州中銀（ECB）は、そういった各国のスタンス・要求を踏まえて、決定をしなければならぬのです。

つまり、一般的な結論を言えば、そういった大きな変化を伴う決定をするには、理解を得るために、時間がかかる、ということです。

+++++

日本の金融政策は、当面のところ、大きな変化はない、と考えます。

つまり、黒田日銀総裁の「異次元」の緩和策に変更はない、と考えます。

+++++

今のところ、こういった各国の金融政策の違いが、今年（2022年）の相場の方性を決めるのではないかと考えています。

+++++

+++++

（2022年01月04日東京時間15:10記述）